咸錫憲のヨハネによる福音書解釈とシアル思想

―1980 年代を中心に―

朴　　賢　淑

Ham Sok Hon's interpreting Gospel of John and Sial Thouht

Mainly in the 1980s

Park, Hyun Suk

抄　　録

1981 年韓国において軍部出身の全斗換が大統領に就任し第 5 共和国が始まると、大学では民主化を叫ぶ若者たちのデモが起こった。同時に言論弾圧が行われ、咸錫憲も雑誌『シアルの声』の閉刊を余儀なくされる。

本稿では 1980 年代に咸錫憲がヨハネによる福音書解釈と民衆化運動を通して、そのシアル思想に見出したものを以下の 2 点から考察した。第 1 に、これまで政治と宗教について探求して来た自己像をヨハネによる福音書 4 章の「イエスに出会ったサマリアの女」に見出した。第 2 に、言論弾圧をはじめとする苦難に直面し、咸錫憲はヨハネによる福音書 16：33 の「あなた方には世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている。」を通して、キリスト教の救いに根差した非暴力的な抵抗運動を見出し、その実践を行ったのである。

キーワード：咸錫憲、シアル思想、ヨハネによる福音書、民主化運動、サマリアの女

（2021 年 9 月 24 日受理）

Abstract

When Chun Doohwan, a military graduate, became president in South Korea in 1981 and the 5th Republic began, there were demonstrations of young people calling for democratization at the university. At the same time, the speech pressure was carried out, and Ham Sokhon was also forced to close the magazine "Sial Voice".

In this paper, through the interpretation of the Gospel of John by Ham Sokhon in the 1980s, what he found in his Sial thought was considered from the following two points. First, Ham Sokhon finds a self-image that he has explored about politics and religions in John's Gospel Chapter 4, "The Samaritan Woman, who met Jesus."

Second, facing hardships including speech repressions, Ham Sokhon called out in John 16 : 33, "Here on earth you will have many trails and sorrowsl But take heart, because I

have overcome the world." Found a non-violent resistance movement rooted in Christian salvation and implemented that practice.

Keywords: Ham SokHon, Sial thought, the Gospel according to John,
Popularization movement, Samaritan Woman

（Received September 24, 2021）

1. はじめに

咸錫憲（1901 ～ 1989 年）は戦前・戦後の韓国における民衆宗教としてのキリスト教を身をもって体現した代表的な人物である。その業績は広義での神学の分野にとどまらず、現代における市民社会を担う人間像を描き出したことにある。

彼は 1960 年代以降、韓国民衆化運動の思想的な土台を築き、「名もなきシアル（씨알；語源的に씨［種の意］に由来し、転じて民衆をあらわす）こそが国や世界の未来を開いて行く」というシアル思想を構築した。

そのシアル思想の民衆観は、モラルに裏打ちされ自立した「考える市民」である。韓国や日本において、この「考える市民」像が十分に確立されているとは言えない時代に、咸錫憲が歴史に根ざした東アジア独自のモラルある市民像を描き出そうと努力した功績は大きいと言える [1]。

1. 1. 問題の所在

すでに筆者の博士論文「咸錫憲におけるシアル思想の成立と展開:『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』を中心に」[2] の中で、咸錫憲の思想形成に影響を与えた日本の無教会運動の指導者である内村鑑三、藤井武、矢内原忠雄との関係を明らかにした。

その一方で、咸錫憲自身の韓国民主化運動とシアル思想の展開時期において、聖書をどのように解釈していたのかについては、未だ研究が進んでないのが現状である。

このような中で、近年、咸錫憲の全集 40 巻がオンラインサイト（ssialsori.net）で公開され、全集（30 巻）に収められなかった雑誌『聖書朝鮮』、『シアレソリ（シアルの声）』に掲載された論文や、講演と説教を行った際のテープが文章化され、全集に加えられている。その中でも、中央神学校で行った「ヨハネによる福音書講義」など、1980 年代当時録音された内容が YouTube で配信されている [3]。

このような咸錫憲に関わる資料が整理・増補されていく中で、これまで明らかにされて来なかった咸錫憲の聖書観、また解釈の特徴を知ることができると共に、シアル思想と聖書がどのように関わっているのかについてより明確な考察ができると思われる。

以上を踏まえて、本稿では 1980 年代における咸錫憲の著作･講演活動と、ヨハネによる福音書解釈がシアル思想の思索においてどのように展開されていったのかについて考察する。

1. 2. 先行研究と研究方法

これまで公表された咸錫憲に関する研究をアンスカン（안수강）は次の３つに分類している。ここでは咸錫憲研究の類型としてアンスカンの分類を取り入れ、従来の先行研究を分析することにする。

すなわち、第１に政治的な観点、第２にその信仰･思想的な観点から論じたものがあり、今後は第３の研究方法として咸錫憲の全生涯に渡りその信仰と思想の推移を考察する必要があると提案している[4]。

そして、第１の政治的な観点から咸錫憲を論じた論文として代表的なものに李正培の論文がある。李正培は論考の中で咸錫憲が西欧キリスト教を受容し、朝鮮史観を発展させ、世界平和主義を論じたと考察している[5]。また、チョンチソク（정지석）は「咸錫憲の民衆思想と民衆神学」において、咸錫憲のキリスト教民衆論と民衆平和論、反国家主義思想を取り上げている[6]。そしてイサンロク（이상록）は「咸錫憲の民衆認識と民主主義論」において、咸錫憲が「民衆」という集団主体の抵抗を強調することにより、民衆主義の内容を急進化する可能性を内包していると考えていた、と言及している[7]。

一方、イミスク（이미숙）は「韓国民衆化運動における地下情報の発信：越境的なキリスト者ネットワーク形成の背景と活動を中心に」の中で、「Ｔ・Ｋ生」[8]として公表した池明観と、日韓をまたぐキリスト者の民衆化ネットワークを解明している。特に1971年に「民主守護国民協議会」が咸錫憲、池学憲、金在俊を代表として結成され、同議会が担った民衆化運動について、詳細な研究がなされている[9]。

第２に、咸錫憲を信仰・思想的な観点から論じた研究としては韓崇泓の著書『無教会主義』を挙げることができる。韓崇泓はその著の中で咸錫憲の思想的な発展、無教会思想、宗教相対主義、マルクスとの比較などを批判的な立場から検証している[10]。またカンドングは「咸錫憲における宗教思想の系譜」において、トルストイとガンディー、内村鑑三と金教臣、柳永模と朴永浩、そして咸錫憲の宗教思想について思想的な系譜から分析している[11]。さらに、キンゼヒョン（김재현）は「咸錫憲の初期思想形成においてキリスト教と社会主義」の中で内村鑑三との出会いを通してキリスト教と民族問題、社会主義の関係を解決する過程を考察した[12]。

そして、「これまでの研究の多くが咸錫憲の民衆論、民主主義論、ガンディー思想の受容、クェーカーなどを取り上げ、その展開過程や前後の相互的な思想の進歩過程などを分析することにのみ傾倒している」[13]とし、アンスカン（안수강）は第３の咸錫憲研究観点として咸錫憲の全生涯における信仰の展開を起承転結という枠組みから取り上げる必要性を主張している。

このことに関して、筆者は博士論文で既に1930年代から1970年代までの咸錫憲の活動とその思想の推移を明らかにして来た。これまで挙げたアンスカンの咸錫憲に関する論文を分類した類型と彼の主張に照らすと、今度は咸錫憲の思想が成熟した1980年代を考察することが課題として残っていると言える。

これを受けて、本稿では1980年代における咸錫憲の活動とシアル思索の展開を考察する

ことにする。その際、これまで出版された咸錫憲の著書に加え、新たに公開されたヨハネによる福音書講義の資料を用い、咸錫憲がシアル思想を展開し、民主化運動の実践を行った際に用いていた聖書解釈に焦点を当てることにする。

咸錫憲は聖書研究について、「聖書研究というのは、本当に深く思索しながら、心を込めて知識的でなく本当に生きる肉体が生きる問題だけでなく精神が生きるいのちの糧である。これを食べないとこれを知らないと生きれないという思いで読まないといけないが、中々そういきません。」[14] と言い、その中でも特にヨハネによる福音書を愛読し[15]、また講演においてもヨハネによる福音書を多く用いていた[16]。

そして、近年、咸錫憲研究の新しい境地が広がっていることを明らかにしなければならない。これまで1983年に全20巻として한길사（ハンギル社）から発刊された咸錫憲全集は2009年に増補版として全30巻が再刊行された。その後、電子版で全42巻が完成された後（2018年）、最近になって全40巻として整理され、sisalsori.netに公開されている。

オンライン公開されている全集40巻には、これまで含まれなかった雑誌『聖書朝鮮』に掲載されていた咸錫憲の文章が加わった。また、これまでの全集には1970年代雑誌『シアレソリ』に発表された文章の中には、当時の政権により削除されていた部分が補完されないままであったが、今回は削除された部分を補完し、本来の原稿が掲載されている。

その他、咸錫憲が日本に招かれ、日本語で講演を行った内容が韓国語に翻訳され、全集に収められた。また、新聞などに掲載された内容も全集に収められたと共に、中央神学校で行った「ヨハネによる福音書講義」の内容が文章化され、全集に加わっている。

この電子版全集の最も大きな特徴は、紙媒体としては未発刊であるものの、従来の全集より1980年代における咸錫憲の活動がより多く含まれている点で特徴的である。

本稿は、この電子版全集（40巻）の中に含まれている1980年代後半の説教文と講演を中心的に分析を行う。

それでは、咸錫憲の思想は時代を追うごとにどのように変化し展開されていったのか。かつて咸錫憲が、「すべての時代は自らの言葉を持っている。その言葉が時代の意味である。春には鳥が鳴き、夏には雷がなり、秋には虫が鳴き、冬には風が吹雪いて、四季の意味を表わすように、歴史上の各時代もそれぞれ自分の声を出して、歴史の意味を外へ表わす」と言及している通り[17]、咸錫憲自身もその時々の流れを吟味しつつ、その思索と実践を模索していったことを明らかにしていくことにする。

ここでは1980年代における咸錫憲のシアル思想展開について、次の3点を中心に考察を行う。第1に、1980年代は咸錫憲が平和と非暴力社会の実現に向けて宗教的対話を活発に行った時期である。実際、これらのことがどのように深化されていったのかを明らかにする。第2に、咸錫憲は1980年に入り、軍事政権の抑圧により、編纂に関わっていた雑誌『씨알의 소리（シアレソリと言い、「シアルの声」の意）』が閉刊を余儀なくされた。そのため、その後咸錫憲は雑誌による発信から、クエーカーの聖書講座など聖書研究を中心に、自身の意見を表明していくという転換が見られる。本稿では、これら聖書講座の中で取り上げられたヨハネによる福音書解釈とシアル思想の展開について考察を行う。

第3に、咸錫憲の初期の論考である『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』における「苦難の担い手」としての「受難の女王」・「娼婦であった女」は、1980年代にはどのような解釈の推移を経たのかについて明らかにする。

2. 咸錫憲の非暴力的な抵抗運動

2. 1. 1980年代以前

咸錫憲は1970年代に入り、東洋思想研究を通してシアル思想への思索を深めていった。1971年7月に聖書・東洋学会を発足し、老子・荘子の定期講義を始め、亡くなる前年の1988年まで続けている[18]。また、同じ時期に中央神学校や韓国神学大学などで「東洋古典講義」の講義を担当している[19]。

このことに関して中央神学校は、民族の自立、平信徒精神、超教派運動を建学理念として1945年韓国解放以後に始められた神学校であるが、咸錫憲は学校の設立者・李浩彬（이호석）と共に「民を教える」ことに意を共にし、小さい神学校の教育事業に賛同していた。この神学校で咸錫憲の教えを受けた江南大・金永一は、「함석헌선생과 배움터（咸錫憲先生と学びの場）」の中で、当時の様子を振り返り、「咸錫憲が1970年代この神学校で、東洋思想講義の他に幾つかの科目を受け持っていた」、ことを記している[20]。

また近年、内村のキリスト教思想に陽明学との関連性を主張する立場の論文が現われ、「内村が朱子学的なキリスト教を批判し、その一方で陽明学的なキリスト教を主張した」[21]との主張がなされている。そうすると、咸錫憲の東洋思想への関連に関しても、内村との影響関係として見なされがちであるが、崔元碩（최원석）はその博士論文「伝統物語の系譜学：内村鑑三物語の解体と再創出」において、咸錫憲が東洋思想に関心を寄せるようになったきっかけは、咸錫憲が「私が東洋思想、老子、荘子の話をし始めたのは、むしろ後になってから、すなわち四、五十以降になってからである。[22]」と記しているように、内村との出会いがその契機となっている訳ではないことが分かる。それはむしろ咸錫憲自身がその師・柳永模の東洋思想研究に触発されたものである、としている[23]。

2. 2. 1980年代

それでは、1980年代に入り咸錫憲のシアル思想はどのように展開されていったのか。

まず、この時期における主要な活動をまとめる。1980年7月、咸錫憲は、全斗換新軍部の独裁政権により、それまで主幹をつとめていた雑誌『シアレソリ』が閉刊する。当時の軍部による言論統制の様子を咸錫憲は1982年1月YMCAで開かれたガンディーの34周忌追悼講演会で、次のように言及している。

> 「…現在、われわれは道が塞がれています。政治･経済的な面だけでなく、精神的にも道が塞がれています。完全に閉鎖されて、室息しそうだと言っても良いほどです。今日、この講堂が、このようにがらがらなのは、本当に意外です。もちろん、厳しい統

制の下にいるのですから、集会が難しいことは知っていました。当局には、正式に書面通知をしたわけではありませんが、それでも私の家に出入りする機関員を通じて、私が集会をするからそのつもりでいてくれ、と言って開いた集会です。そして、ソウル内にある新聞社にはすべて、通知を送りました。通知を送れば、集会欄にでも紹介をしてくれるかと思ってそうしたのですが、一つも紹介してはくれませんでした」[24]。

その後も、軍事政権は咸錫憲を自宅軟禁、盗聴、尾行するなどの弾圧を続けた。

しかし、『シアレソリ』閉刊後、咸錫憲の著作や近況についてメディアでは一切報道が禁止されたものの、咸錫憲自身は老子研究会、荘子研究会、聖書集会、釜山の集いなど集会を開き、招待があればどこにでも出かけ講演を行った。咸錫憲は国家の存在理由は、本来、国家の主人である民、個々の生命を保護し生かし、できるだけ人間らしい平等と平和共同体を作ろうとすることにあると主張した[25]。

しかし、近代化プロセスにおいて、政治権力と経済・文化の権力は結託し、自己を隠蔽し、国家の主人である民を抑圧し、非人間化しようとする傾向がある。咸錫憲のシアル思想の最大の業績は、このような近代化の矛盾を直視し、歴史と国の最終的な主権者は民であると解釈した点である[26]。このようなシアル思想の展開と発信を通じた咸錫憲の政治権力に対する批判的な抵抗は、咸錫憲が明らかにしているように宗教的な思想に基づいていた点にある。特に、咸錫憲が定期的に聖書を学ぶ集会を開くことについて次のように述べている。

「わが国の宗教には、熱心さはあるが教育的な点が欠けているため、せっかく良い信仰を持っていても、非常にだめな点が多い。これから先、さらに教育について深く考える必要性がある」[27]。

このように咸錫憲は政治と宗教、教育において、韓国のキリスト教が抱える問題を分析している。

2. 3.「共に生きる」

咸錫憲の民主的な抵抗運動は、その生涯を通じ、一貫してガンディーの非暴力運動に倣ったものである。

ところが、1981 年に軍部出身の全斗換が大統領に就任した際、大学では民主化を叫ぶ若者たちのデモが起こり、1982 年には大学生が釜山のアメリカ文化院に放火した事件、1987 年にはソウル大学朴鐘哲拷問致死事件が発生した。

しかし、咸錫憲はガンディーの非暴力抵抗運動に倣って、いかなる暴力行使も肯定しなかったと言う。そのため、時には若者たちとの間に葛藤もあったとされるが、咸錫憲は一貫して非暴力的による抵抗運動を実践した[28]。咸錫憲自身が主幹をつとめていた雑誌『シアルの声』が閉刊され、言論の自由が奪われた身であるにもかかわらず、次のように徹底

的な非暴力運動を訴えている。

「これは私たちだけの問題ですか。この国で騒がしいことが起こるとすれば、第3次世界大戦として爆発しないと言えますか。…だから、それらのことは、底辺から、シアルから目覚めなければいけないのです。…そのガンジーが確信を持って勧めたのは、また私が勧めたことは、『悪の勢力に勝つためには、非暴力的な原理によらなければならない』ということです」[29]。

の通りである。それでは、軍部の言論統制に対し、咸錫憲はどのように、自分の考えを明らかにしたのか。この時期における主要な活動を以下の3つに分けることができる。

第1に、キリスト教界内での活動を通してである。主に、各個教会での説教、ソウルYMCAでの東洋思想研究講座、クエーカーの集会などを通して、自身の主張を明らかにしている。

第2に、国内に向けての活動である。1987年1月には金在俊牧師と共に声明発表を筆頭に、軍部に抑圧・弾圧され、連日デモや抗議を繰り返している韓国の若者と大学生に向け、メッセージを発信していた。その中でも1984年には梨花女子大学で「4・19と人間革命」を講演、また高麗大学では「新しい世代に伝える言葉」、そして同年8月には延世大学にて開催された全国大学生の夏キャンプで集まった1,500人の若者に「燃える乾きでもって」というテーマで講演を行っている。

第3に、この時期になり咸錫憲は海外にも活動の場を広げるようになり、1981年には東京で開かれた世界精神指導者会議、1982年と85年にはアメリカ、カナダを訪問している。また、1983年には日本の友和会の招聘により、日本の各地と沖縄、早稲田教会を訪問する。特に、東京に滞在した際には、関東大地震60周年講演会（主催:韓国キリスト教団体）を行っている。

また1985年夏には、アメリカの各地にある韓国教会において、「政治と宗教」、「キリスト者の使命」、「新しくされた人」のテーマで講演を行い、同年12月には東京の早稲田教会において「（第21回）韓国キリスト者との連帯を思い祈る会」の主催で「韓国の民衆運動と私が歩んだ道」という題で講演を行っている。さらに、1988年9月に開かれたソウル・オリンピックの平和大会では、記念演説を行った。

以上のように、1980年代における咸錫憲の雑誌を通しての言論活動は軍部により弾圧されたものの、キリスト教界と国内・外における彼の積極的な言論活動は、更なる発展を遂げたと見ることができる。

2. 4. 1980年代の「受難の女王」言及

咸錫憲のシアル思想の基調である「苦難」は、苦難に裏打ちされた咸錫憲の生き方とその実践が原動力となっている。「この苦痛、この言われのない苦痛は、なぜ生まれて来るのか」という事に対して、咸錫憲はガンディーの「苦難は生の一つの原理である」という言

葉に勇気づけられ、ガンディーの非暴力運動に倣っていたことが分かる[30]。

また、咸錫憲の「受難の女王」とは「私はわが国を受難の女王、歴史の道端に座る年老いた娼婦と言っている」[31]と述べているように、彼が自国の歴史に見出した一つの象徴であった。世界の道端で座る年老いた娼婦「受難の女王」に誰も同情する人はおらず、助ける人もない。しかし、彼はこの「受難の女王」が韓国の姿に思えてならなかったのである。

このような咸錫憲の「受難の女王」像として、彼はロダンの作品「娼婦であった女」像を示しているが、この「受難の女王」の思想的な背景には、タゴールのヒンドゥー教を土台とした宗教詩「受難の女王」が引用されており、これらを通して咸錫憲は他宗教にもキリスト教の思想と共有できるものがある、という宗教的な寛容を見出している[32]。

また、咸錫憲はその後の東洋思想の研究と思索を通して、1982年民主化運動の最中に、苦難克服についての演説の中で、孟子の言葉を引用し、シアル思想の広がりを見せていることはすでに前稿で明らかにした[33]。

また、1980年『シアルの声』1･2月号に掲載した「民族的ビジョンを育てなさい」の中で、咸錫憲はソ連における人権活動家･サハロフ博士の軟禁について言及し、「義のために迫害を受ける人は、幸いである。天の国が彼らのものである」と述べ、講演の最後の部分で、「シアルの皆さん、受難の女王！」と呼びかけている。その際、シアルとしての一人一人が受難の女王であるのだ、という解釈を行っていることが分かる[34]。

以上から、シアルは複数形の「people」であり、1980年代においては咸錫憲のシアル思想は単に韓国の人々を意味するだけでなく、世界の抑圧にあえぐすべての弱者を視野に入れ、脱民族主義的に捉えるようになったことが分かる[35]。

それは1994年に章其弘（チャンキホン）が、次のように振り返っている点からも明らかである。すなわち、

> 「咸錫憲先生は…日本帝国主義が去ってから、韓民族は内にある罪悪のため、さまよわざるを得なかった。歴史の渦巻きの中に生きながら、咸錫憲は次第に民族の救いの課題と世界人類の救いの課題を同一視するようになった。彼の宗教的課題である救いが、普遍性を帯びるようになったのである。彼のシアル思想はその探求過程の産物であり、彼が得た解答である」[36]。

このようにシアル思想の初期において、民族の自画像として生み出された咸錫憲の「受難の女王」は、国が抱えている問題や課題のみならず、次第に世界人類の救いの課題へと、実質的な広がりを見せている。

3. 1980年代における「ヨハネによる福音書」解釈

3. 1. 咸錫憲とヨハネによる福音書

咸錫憲は聖書の中でも特にヨハネによる福音書を愛読し、その講演などでも良く用いて

いた。それはヨハネによる福音書が他の共観福音書に比べ哲学的であり[37]、東洋的な思索の表現がなされている[38]、という認識によるものであった。

特に、咸錫憲全集第19巻に収められているヨハネによる福音書の解釈4つの中には、聖書に対する咸錫憲の解釈と信仰の本質についての理解が記されている。それら「内面のイエス」、「はじめに言葉があった」、「魂の糧」、「世の光」というタイトルが付けられたヨハネによる福音書解釈の4つの文章は、いずれも1981年に、クエーカーの集会で話した内容が文章化され収められている。

また既に述べた通り、咸錫憲は1970年代から中央神学校で「ヨハネによる福音書講義」科目を受け持っており、電子版全集や、YouTube「ヨハネ福音書講解（第1回～60回）」(ssalsori.net) からも咸錫憲がどれほどヨハネによる福音書研究に傾倒していたのかうかがい知ることができる。

3. 2. 聖書は「意味の世界」

咸錫憲は「聖書は『意味の世界』であり、『人は何によって生きるのか』について記している書物である」と理解していた[39]。特に、ヨハネによる福音書における「人はロゴス（Logos）によって生きる」という箇所の表現は、人は意味によって生きるというその「意味」自体に、その焦点が置かれているとの見解を示している[40]。

したがって、咸錫憲はヨハネによる福音書1：1～18は、文章であるというよりは、詩とも言える部分であり、ヨハネによる福音書全体にあらわれている宇宙観と信仰観は、他の共観福音書に比べ、東洋的な思考に合致している、と指摘している[41]。

このように咸錫憲が「聖書は意味の世界である」と理解していることから、1960年代に初期論文『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』のタイトルを『聖書的から見た…』から、『意味から見た…』に替えたのは、タイトルは変わったものの、その土台に流れる基調は実は変わらなく一貫していた、と理解することができる。このことについて、咸錫憲は次のように述べている。

> 「著書『意味から見た韓国歴史』を出版して40年が経ちました。これらは雑誌『聖書朝鮮』に30余回連載していたものが、そのもととなっています。当時、雑誌『聖書朝鮮』は読者が200人ほどの小さな人数であり、歴史学者たちには殆ど受け入れられませんでした。単行本になることは思ってもいませんでした。しかし、1945年8月解放を迎えてから、これらの文章が光を見ることになりました（筆者訳）」[42]。

と述べ、さらに次のように振り返っている。

> 「私は小さい頃から強い民族主義、そしてキリスト教信仰の基で育ちました。…この本の骨子となる思想は「韓国の歴史は苦難の歴史である」ということです。…キリスト教の真理である「苦難の僕」思想を韓国の歴史に当てはめてみようとした際、出て来

たのが「苦難史観」でした。歴史において大切なのはその史実であるよりは、その解釈であると思います。…著書における「苦難」という言葉は、キリスト教の考えから出て来たものです。聖書におけるキリストの苦難を韓国の歴史に当てはめてみようとしたのです」[43]。

その後、咸錫憲は1973年7月に延世大学教授･金東吉との公開対談の中で、その苦難史観がキリスト教の苦難の僕像から由来していること､そしてタイトルが『意味から見た…』に変わったとしても、著書に流れる聖書的史観は変わってないことを明らかにしている。

それでは、なぜ咸錫憲はこのような宗教的な聖書に立脚した歴史観を示すようになったのか。それは1930年代､彼が連載論文「聖書立場から見た朝鮮の歴史」を掲載していた当時、五山学校で「歴史」と「修練」科目を教えていて、韓国の歴史について思索を重ねていたことが分かる。特に、自国が受けた苦難については、

「若者に苦難を苦難だけでなく、栄光として受け止めてもらうためには、歴史の意味を知り、（歴史的な史実を）単に、成功や失敗という事柄だけで捉えるのではなく、より長い見識を持ってそれを解釈すべきです。…私たちは苦難を受けるために生まれて来たように見えるがそれには使命があるのだ、という解釈を導き出すため、非常に苦悩しました（筆者訳）」[44]。

このように咸錫憲は当初の1930年代は歴史を教える教師として、韓国の歴史が示している意味と若者が受け継ぐべき歴史的な使命を示そうとしていたことを明らかにしている。

3. 3.「信仰の内面化：キリストとの内面的一体」[45]

（1982年7月25～28日、クエーカーの聖書集会）

1980年代になると、咸錫憲は多くの集会で、自らの歩んで来た道について振り返り、またこれからそのバトンを受け取ったシアルが、これからどのような国、また世界を築いていくべきなのかについて説くようになる。その中で、特記すべき点は以下の3つである。

第1に、1980年代に入り、彼は「シアル思想の根底にある民・民衆に関心を持ち始めたのは『聖書的立場から見た朝鮮歴史』を書いた頃である」ということを明らかにしている[46]。またその時期にイタリアのマッツィーニに刺激されていたこと、それはマッツィーニが徹底した民主主義者であり、その掲げていた標語が「神と民衆（God and People）であったことに共感していたことを明らかにしている[47]。

第2に、この時期における東洋思想の研究から、「民衆」という言葉が、孔子（「民為貴：民を貴しとなす」）や、孟子（「民為貴 社稷次之 君為軽：民がまず貴く、社稷が次に貴く、王が最も軽い存在だ」）など、「正しく考える人たちはみな、底辺にいる人々、地位もなくお金もなく何もない人々が世の中の根本だということを言っていた」として、マッツィー

ニの民・民衆についての見解と比較し、東と西における民・民衆への思想への一致を見出している[48]。

第3に、聖書研究を通して「信仰の内面化」、すなわちその内面で神の似姿として授けられた生命を体験することの重要性、特にヨハネによる福音書4章における「イエスに出会ったサマリアの女」についての思索が深まっていったと言える。

特に、サマリアの女にイエスが「あなた方がこの山でもあの山でもエルサレムでもなくここでもない所で、場所を選ばなくても、父を礼拝する時が来る」という箇所を咸錫憲は、「内に新たな時代が開かれて歴史が生み出される」という歴史は精神的な発達であることを明確にしているとの解釈を行っている[49]。

また、既に2.4.において「宗教における救いの問題、国と世界の救いの問題を次第に同一視していくようになった」との主張を引用したように、「宗教こそが世界の問題を道徳的、精神的に慎重に考えねばならない。この問題が段々内面化されていき、人類全体の問題として考えていかねばならない。」という世界と人類の問題が抱えている課題を宗教の問題として共に深く考え、内面化していき、「共に生きる」ことの必要性を説いている。

すなわち、1980年代における咸錫憲の思索は「私と私たち」にとどまらないで、「世界と人類」が掲げている問題を「宗教や信仰のレベル」にまで内面化し、共に考えて行くことの重要性と必要性を説くまでに広がりを見せ、実際に咸錫憲自身が韓国の全域や世界各地に出かけて行き、それを実践していった時期であったと捉えることができる[50]。

3. 4. ヨハネによる福音書とシアル思想

ここで注目すべき点は、咸錫憲がヨハネによる福音書解釈の中で、シアル思想についての思索を行っている点である。まずシアル思想について、咸錫憲は次の聖書箇所を引用している。すなわち、

> 「シアル（民）について説明が必要です。イエスが人々に例え話を用いて話された際にも、『種を蒔く人が種蒔きに出て行った。蒔いている間に、ある種は道端に落ち、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。他の種は石地に落ち、他の種は茨の中に落ち、また、他の種は良い土地に落ちた。（ルカ8：5～8）』とされてます」[51]。

このシアルについての思索が成されている箇所の中で、その解釈を行う際、咸錫憲はヨハネによる福音書に登場するニコデモについて言及している。

> 「…このように、人々はそれぞれ異なります。だからイエスは自分の心の中には既に分かっていたが、誰にでも同じ話を直接話しても理解できません。それはニコデモも同じでした。『私が地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう（ヨハネ3：12）』と言われた通りです。ヨハネによる福音書3章に登場するニコデモは、そういう意味から登場したと言えます。ニコデモは一

見、外から見ればかなり堅実な信仰の持ち主であり、地位もあり、知っていることも多いけれども、中身を見ると貧弱な人でした。」[52]

また、咸錫憲はこのシアル（種）がイエスにおいてはヨハネによる福音書 12:24 に記されている十字架の道を担うことを示唆している、と解釈している。咸錫憲は、「まことに、あなた方に言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」と言うイエスの言葉は、朽ちない神の言葉がシアル（種）が内にあってこそ、この世に向かって朽ちるシアル（種）になり得るという解釈がなされている。

これらのことから、ここでそれぞれ違う土地に蒔かれた種（シアル）とは、一人一人に神の言葉（シアル：種）が蒔かれて、各々に担うべき使命があるとの解釈をすることができる。

そして、私たちが「イエスと一体化」することは、イエスが十字架を担ったように、私たちも各々の使命を担うことを意味し、それこそが「信仰の内面化」であると言えよう。

3. 5.「私はサマリアの女」

咸錫憲はヨハネによる福音書 4 章に登場するサマリアの女について、度々言及している。そこでは、ユダヤ人たちが宗教的に関わろうとしなかったサマリアの女性がどのようにしてイエスに出会い、永遠に渇くことのない命の水、魂の救いを得たのかについて記されている。聖書本文は次の通りである。

「イエスは答えて言われた。『この水を飲む者は誰でもまた渇く。しかし、私が与える無水を飲む者は、決して渇かない。私が与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。』女は言った。『主よ、渇くことがないように、また、ここに汲みに来なくてもいいように、その水をください。』イエスが、『行って、あなたの夫をここに呼んでください。』と言われると、女は答えて、『私には夫はいません。』と言った。イエスは言われた。『夫はいませんとは、まさにその通りだ。あなたには 5 人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。』女は言った。『主よ、あなたは預言者だとお見受けします。』」（新共同訳ヨハネ 4：13 ～ 19）

これらの内容は、サマリアの女がイエスの前に自分自身をさらけ出し、その罪の告白をすることで、イエス・キリストの福音を受け入れる契機となっている。

「女が言った。『私はキリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。その方が来られる時、私たちに一切のことを知らせて下さいます。』イエスは言われた。『それは、あなたと話をしているこの私である。』」（新共同訳ヨハネ 4：25 ～ 26）

この箇所の解釈の中で、咸錫憲はこれまでの自分を振り返り、自分の罪を次のように告白している。すなわち、

「私はサマリアの女です。私の夫は5人です。固有宗教、儒教、仏教、長老教、そしてイスラム教。しかしその何れも私の魂の主人ではありません。今、私が属しているクェーカーも私の魂の主人ではありません。私は現場で捕まった娼婦です。道徳と宗教で批判される時、私には一言の言い訳もできません。

私はマグダラのマリアです。私の内にある7つの悪魔を彼の足もとで告白しなければなりません。私の心の壺を壊して、一度に注いでしまわなければなりません。

私がユダです。私は私の心を打ち明けなければなりません。私の家族と先生と友人の前でできなかったことをイエスの前に打ち明けなければなりません。私は全歴史の圧力をこのか弱い背骨の上に感じ取ります。韓国の一人のサマリアの女であり、淫女であり、マリアであり、ユダです」[53]。

とあるように、咸錫憲は韓国固有の宗教など古来から信仰された儒教と仏教、また幼い時に属していたキリスト教の中でも長老派、そして翻訳書『預言者』を通して始まったイスラム教の研究など、これまで関わったいずれの宗教も咸錫憲の魂の主人ではなかったこと、また当時、属していたクェーカー派さえもその魂の主人ではないこと、これらのことは道徳と宗教で見た場合、現場で捕まった娼婦と同じであり、イエスに7つの悪魔（悪霊）を追い出してもらったマグダラのマリア（ルカ8：1、ヨハネ19：25、ヨハネ20：1～18）であり、イエスを裏切ったユダである（ヨハネ6：64～71、12：1～8、20：19～29）と告白している。この罪の告白を通して、咸錫憲は救い主として来られたイエス・キリストの前に進み出るのであった。そして、イエス・キリストが十字架での受難を受けたように、自分の中にあるサマリアの女を告白した際、キリストと出会い、これまでの信仰が内面化され、自分の使命に生きようとしたのである。

この「サマリアの女」は1980年代に完成された咸錫憲における宗教的な自画像であったと言える。この「イエスに出会ったサマリアの女」は、1980年代咸錫憲のシアル思想において新しい視座を与えているのである。

咸錫憲は40・50代に入り、東洋の経典とも言える老子・荘子の研究の成果を雑誌『シアレソリ』に掲載した。一方で、ヒンドゥー教の経典を翻訳し、『シアレソリ』に連載している。この経典は咸錫憲が非暴力平和運動とその実践において多くのヒントを得たガンディーの愛読書でもあった。咸錫憲はガンディーを宗教家として捉え、ヒンドゥー教の経典とその思想を貫いた、と理解していたのである。

このようにして、咸錫憲は東洋と西洋をまたぐヒンドゥー教、仏教、儒教、キリスト教の経典を学んで、より宗教的な思索を続ける。しかし、これらのことが宗教的に「混合主義」を意味するものではないことを咸錫憲は講演の中で明らかにしている[54]。

このことについて、高崎宗司は「咸錫憲の『イエスが死によって逆に勝った』という言

葉や、ガンディーを『もう一人のキリスト』と高く評価していることからも分かるように、語られているのは、信念や信仰であって、理論ではない、ということを前提として咸錫憲を理解する必要がある」、と提言している[55]。

また無教会の時から咸錫憲と関わっている張起呂（チャンキリョ）も、次のように説明している。

「咸錫憲先生は自分はクリスチャンでないということをキリスト教講演の時、また聖書講義の時などに言われ、広大な真理を説明するのに老子、荘子の話をすることがあります。教理に固執し、神様のみ旨を知らない人々は、自分はそういうキリストは信じないとよく言われました。私も先生がそのように言われたのを聞いたことがあります。

それで私は咸先生に、『先生は聖書の講義中、老子、荘子のことをよく話されますが、どなたを信仰していますか?』とある時、うかがったことがありました。そのお答えは、『自分は老子、荘子は好きではあるが、自分の頭を下げ、ひざまずいて自分のすべてを捧げる方はイエス・キリストのみである』、と明確に申されました。私はこの時のこの先生の言葉で、咸錫憲先生はクリスチャンであると証したいと思う次第です」[56]。

と証言していると共に、また咸錫憲が東洋と西洋をまたぐヒンドゥー教、仏教、儒教、キリスト教の経典を学び宗教的な思索を続けたこと、その学びを通して今、本当のキリスト教は何かということを広い視野に立って追求し、「キリスト教は何をしようとして何万人もの殉教者を出し、この隠遁の韓国の国民のもとに来たか…この受難の民族を甦えらせるためではないのか。それなのに真のクリスチャンはいないのではないか」と悩み苦悩していた、ということが分かる。

また、金敬宰（김경재）はこれらのことについて、ヨハネによる福音書４章に登場するサマリアの女がキリストと出会った喜びを町中の人々に伝えたことと同様、咸錫憲が「生の座」において、イエスに出会い、イエスの霊性とその命を宣べ伝え、権威の殻を投げ出したのだ、との神学的な視座を示している[57]。つまり、咸錫憲が自分の「生の座」において「私がサマリアの女」である、と告白したように、咸錫憲のメッセージが届く一人一人に、咸錫憲は自分の中にいる「サマリアの女」を見出すことを促している。

自分自身をすべてイエスに告白したことで、サマリアの女がイエスをキリストであると見出したように、シアルもそれぞれの中にあるサマリアの女を告白することによって、キリスト（救い主）に出会えるのである。

3. 6.「絶対勝利」

（1980年８月17日教会で行った説教。
雑誌『씨알의 소리（シアレソリ）』1988年12月、96号）

この説教と表題は、その内容からヨハネによる福音書 16:33 に書かれているイエスが言われた勝利に由来する、と考えられる。咸錫憲が、

「これらのことを話したのは、あなた方が私によって平和を得るためである。あなた方には世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている。」

と述べている点からもそれは明らかである。この「絶対勝利」は咸錫憲が行った説教が、その後、雑誌『씨알의 소리（シアレソリ）』に掲載された。しかしこの説教は全集（全 20 巻）には収められておらず、軍部の言論弾圧が終わり、民主化が定着した 2009 年になってようやく著作集（全 30 巻）に加えられた。

このようなことからも、この文章が当時の政府からすれば、どれほど危険で問題的な内容であったのか推測することができる。1980 年当時、軍部の言論弾圧によって雑誌『シアレソリ』に掲載される文章は全て検閲された。その中で関係者が逮捕・連行されることも起こり、ついに閉刊を強いられた。

その最中にある教会で行った説教がこの「絶対勝利」であった。また咸錫憲は冒頭に、咸錫憲は聖書の次の箇所を引用している。それはイエスが初代キリスト教会の迫害を予告している箇所であった。その聖書の箇所は、まさに当時、咸錫憲が置かれた状況と同じであったことをうかがい知ることができる。

「イエスが言われた次の言葉は真実です。あなた方が今、これからどこへ連れて行かれるか分からない。またこの世でいわゆる裁判を行う、政治をする人々の前に引きずり出されるかも知れない。その際に、何を話そうか。何と答えようか。心配するな。その時に言うべきことを知らせて下さる、と聖書に書いています。『なぜなのか？それは答えるのはあなた方ではなく、あなた方の中におられるあの方が話されるので、心配するな！』という言葉を今、この瞬間に思い出します（筆者訳）」[58]。

説教の中で、咸錫憲はヨハネによる福音書 13 章～ 17 章を繰り返し読むように勧めている。これらの聖書箇所は、イエスが十字架を背負うまでの最後の一週間の出来事が取り上げられている箇所である。説教の中で、咸錫憲はイエスの十字架への道、そしてその弟子たちへの愛について述べている。

同時に、咸錫憲は「私たちの目標は永遠のものである」として、ヨハネによる福音書の核心に触れている。その中で、咸錫憲は自分自身が歩んで来た道を振り返りながら、初志一貫、「私たちの戦いは既に勝っている戦い」であると苦難の中にいる人々を励ましている。

また、直面した苦難に対して、私たちはイエスが十字架を背負ったのと同じように、聖書の言葉を信じて、世界史における私たちの使命を担って行こうと呼びかける。このような使命を受け入れてこそ、私たちに勝利がある。その勝利とは、この世での勝利を意味す

るのではなく、神から与えられる天の国で受け取る勝利であることを明らかにしている[59]。

この説教「絶対勝利」が当時、危険視され弾圧に遭った理由を考える時、説教文の中に1979年10月26日に起きた朴正熙大統領が「宮井洞事件」より殺害された事件に咸錫憲が言及していることに雑誌『씨알의 소리（シアレソリ）』と咸錫憲への弾圧の理由があった、と考えられる。

4. 結び

金敬宰は近代化の致命的な問題は、人間の「究極的な関心」、すなわち生命の崇高さ･自然への敬畏、存在の神秘についての議論を外に追いやり、宗教の問題を個人の私的な関心領域として見なしてしまった点にあり、その代価が今、現代社会が抱えている霊性の渇きである、と言われている[60]。

そのような観点からすると、咸錫憲のシアル思想は「歴史の当事者は英雄・階級・国家ではなく、民衆（シアル）であること、そして苦難の後に楽園が訪れるのではなく、苦難は生の一つの原理である」ことを強調している。苦難を通して人生と歴史は昇華され、動物的本性を次第に克服しながら精神化され、霊化されるのである[61]。

これまで1980年代における咸錫憲の「宗教的な思索」、特にヨハネによる福音書解釈に焦点を当て、同時期におけるシアル思想の展開を考察して来た。

1980年代は咸錫憲のシアル思想が活発に展開され、成熟し完成された時期であった。不安定な政治的な状況で、韓国の人々に市民意識を目覚めさせ、平和的で非暴力的な抵抗運動を促し、咸錫憲自らが一人のシアルとして実践を行ったのである。

本稿の考察を通して1980年代に入り、咸錫憲のシアル思想は成熟し、完成されていったと言うことができる。韓国の政治的情勢によりその活動が制限された時期でさえ、咸錫憲はクェーカーとして、国内外の意を共にする人々と共にその活動を広めて行き、宗教的な思索を深めていった。

結びとして、咸錫憲における1980年代の活躍を次の3つに要約することができる。第1に、ヨハネによる福音書解釈冒頭で、「聖書とは意味の解釈である」と解釈する咸錫憲の見解から、シアル思想初期の連載論文『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』が、後にそのタイトルが『意味から見た朝鮮の歴史』とタイトルが変わったものの、著書の中に流れる土台は聖書であり、一貫して聖書が示す苦難の意味とその克服について思索していることが明らかになった。

第2に、咸錫憲のヨハネによる福音書解釈において独自な点は、「イエスに出会ったサマリアの女」を自己像として告白している点にある。

第3に、度重なる民主化運動への弾圧の中でも、ヨハネによる福音書を通して咸錫憲はイエス・キリストと共に考えるシアルが担うべき使命を示している。このように世界の中で「共に生きる」ために、それぞれが担うべき使命が明らかにされたことで、「考える市民像」が展開されていった、と言うことができる。

最後に、これまで現代の宣教学的課題として浮上した宗教の多様化・多元化問題について、咸錫憲のシアル思想は先駆的な視座を与えている点を考察した。すなわち、世界と人類が抱えている問題を宗教の問題として共に深く考え、それを内面化していき、「共に生きる」ことの必要性を説いている点である。

世界が直面する地球規模の諸問題において、「非暴力的な市民的抵抗運動」を導き出した咸錫憲のシアル思想を考察することで、私たちは今後、宗教が世界と人類に貢献できる道を模索できるものと考える。

【註】

1 朴賢淑（2012）「論文審査結果の要旨」「咸錫憲におけるシアル思想の成立と展開：連載論文『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』を中心に」、関西学院大学リポジトリ.

2 前掲書.

3 Ssialsori.net.

4 안수강（アンスカン；Ahn, Su-Kang）（2016）「咸錫憲の信仰転換の考察」『韓国キリスト教神学論総』102 号、pp.105-141.

5 이정배（李正培；Lee, JeongBae）（2006）「咸錫憲の『意味から見た韓国歴史』の中にあらわれた‘民族’概念の神学的考察：申采浩の民族史観と安重根の東洋平和論の地平から」『神学と世界』、pp.162-192.

6 정지석（チョンジソク；Jeong, Jiseok）（2006）「咸錫憲の民衆思想と民衆神学」『神学思想』134 号、pp.101-133.

7 이상록（李常緑；Lee, SangLock）（2010）「咸錫憲の民衆認識と民主主義論」『史学研究』97 号、pp.147-190.

8 「T・K 生」とは、雑誌『世界』（岩波書店）に 1973 年 5 月号から 88 年 3 月号までの 15 年ものあいだ「韓国からの通信」を書き続けた人物のペンネーム.

9 李美淑（Lee, MiSuk）（2012）「韓国民衆化運動における地下情報の発信：越境的なキリスト者ネットワーク形成の背景と活動を中心に」『コンタクト・ゾーン』（第 5 巻）、京都大学学術情報リポジトリ、pp.145-172.

10 한숭홍（韓崇泓；Han, SungHong）（2011）『無教会主義』、図書出版두란노、pp.29-56.

11 강동구（姜敦求；Kang, DonGu）（2001）「咸錫憲における宗教思想の系譜」『宗教研究』23 号、pp.1-22.

12 김재현（金在賢；Kim, JaeHyun）（2010）「咸錫憲の初期思想形成においてキリスト教と社会主義」.

13 안수강（アンスカン）（2016）「咸錫憲の信仰転換の考察」『韓国キリスト教神学論総』102 号、pp.105-141.

14 咸錫憲（1985）『영원의 뱃길（永遠の航路）』（全集第 19 巻）、한길사（ハンギル社；ソウル）、pp.113-114.

15 前掲書、p.115.

16 前掲書、p.188.

17 曺亨均（訳）（1994）「人間革命」（論説集『人間革命』）1661 年、『韓国のガンジー咸錫憲の基本思想』、伯裁文化社、p.478.

18 前掲書、p.478.
19 鄭賢弼（編）『咸錫憲全集（資料集）』、p.41.（ssialsori.net）
20 김영일（金永一；Kim Young-il）「함석헌선생과 배움터（咸錫憲先生と学びの場）」、2014 年.（ssialsori.net）
21 김정곤（金正坤；Kim, JeongKon）（2013）「内村鑑三と陽明学」『陽明学』（第 34 号）、陽明学学会論文集；ソウル、pp.315-355.
22 崔元碩（2019）「伝統物語の系譜学：内村鑑三物語の解体と再創出」、立教大学学術リポジトリ.
23 咸錫憲（2009）『咸錫憲과의 対話』著作集（第 25 巻）、한길사（ハンギル社）；Seoul、p.436.
24 咸錫憲（著）高崎宗司（監修）（1992）『シアル革命の夢』、p.236.
25 金敬宰（2018）、pp.57-59.
26 前掲書、pp.57-59.
27 高崎宗司（監修）咸錫憲（著）（1992）『シアル革命の夢』全集（第 8 巻）、新教出版社、p.182.
28 咸錫憲（著）（2009）『우리 민족의 이상（民族の理想）』著作集（第 13 巻）、한길사；Seoul、pp.227-230.
29 高崎宗司（監修）咸錫憲（著）（1992）『シアル革命の夢』、pp.197-235.
30 朴賢淑（2012）「咸錫憲におけるシアル思想の成立と展開：連載論文『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』を中心に」.
31 咸錫憲（1983）『역사와 민중（歴史と民族）』（全集第 9 巻）、한길사；Seoul、p.280.
32 朴賢淑（2012）「咸錫憲におけるシアル思想の成立と展開：連載論文『聖書的立場から見た朝鮮の歴史』を中心に」、関西学院大学リポジトリ、p.159.
33 前掲書、p.152.
34 咸錫憲（1989）『씨알에게 보내는 편지（シアルに送る手紙）』（全集第 8 巻）한길사、pp.457-462.
35 金晟秀（2003）『咸錫憲評伝』、삼인사；Seoul、p.61.
36 咸錫憲（著）森山浩二（訳）（1994）『新しい時代の宗教』、pp. 序文 2-3.
37 咸錫憲（1985）『영원의 뱃길（永遠の航路）』、p.115.
38 前掲書、p.133.
39 前掲書、p.138.
40 前掲書、p.139.
41 前掲書、p.139.
42 咸錫憲（1987）『뜻으로 본 한국역사（意味から見た韓国歴史）』（全集第 1 巻）、한길사、pp.381-382.
43 前掲書、pp.382-385.
44 前掲書、p.385.
45 咸錫憲（著）仁科健一（訳）（1992）『考える民でこそ生きられる』、新教出版社、p.120.
46 咸錫憲（著）仁科健一（訳）（1992）『考える民でこそ生きられる』、前掲書、p.223-224.
47 前掲書、pp.123-124.
48 前掲書、pp.125-128.
49 前掲書、pp.163-164.
50 前掲書、pp.165-166.
51 咸錫憲『영원의 뱃길（永遠の航路）』、pp.202-203.
52 前掲書、pp.202-203.

53 咸錫憲（1989）「ユダを追い給うイエス（友よ！）」『씨알의 소리（シアルの声）』（1971 年 8 月号）、曺亨均（訳）（1994）『韓国のガンジー咸錫憲の基本思想』、p.253-254.

54 咸錫憲（著;1981）朴賢淑（訳;2016）「歴史の意味（역사의 의미）」『シアル咸錫憲全集』（第 25 巻）、p.418.（http：//www.ssialsori.net/bbs/board.php?bo_table=ssial_book&wr_id=26&page=2） これは 1981.9.24 東京（思草庵）「世界精神指導者大会」でなされた講演原稿を依頼により、筆者が訳したものである．サイトで公開されている全集（全 40 巻）は今後、出版される予定である．

55 咸錫憲（著）高崎宗司（監修）『シアル革命の夢』、p.272.

56 張起呂（1992）「咸錫憲と私」咸錫憲（著）高崎宗司（監修）『シアル革命の夢』、p.4.

57 チェシンヒョン「咸錫憲と韓国キリスト教①：韓国教会はなぜ咸錫憲を排斥したのか」『sisaon』、2011 年 6 月 20 日付け記事.

58 咸錫憲（2009）「절대 승리（絶対勝利）」『우리 민족의 이상（民族理想）』著作集（第 13 巻）、pp.271-293.

59 前掲書、pp.370-372.

60 金敬宰（2018）片岡龍（訳）（2018）「韓国近代化を貫通する変革運動の主楽相の省察：共同体の生宇宙－神－人的霊性、社会的政治的改革を中心に」『霊性と平和』（第 3 巻）、p.44. この論文は金が 2018 年に韓国の円光大学宗教問題研究所が主催した研究会で行った講演が『韓国宗教』（第 43 号）に掲載された韓国語の論文を東北大学の片岡龍が日本語に翻訳したものである．

61 前掲書、pp.53-54.